airiti Library

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

新聞報道記事の見出しの表現的特徵—「客観性」に対するレトリック分析の観点から—

從「客觀性」修辭的分析觀點，探究新聞報道文章標題的表現特徵

doi:10.6205/jpllat.23.200806.05

台灣日本語文學報, (23), 2008

作者/Author： 落合由治(Ochiai Yuji)

頁數/Page： 87-111

出版日期/Publication Date：2008/06

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

http://dx.doi.org/10.6205/jpllat.23.200806.05

DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 http://doi.airiti.com

For more information,

Please see: http://doi.airiti.com

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

最完整的學術整合查詢平台—華藝線上圖書館 ● http://www.airitilibrary.com ● Find more academic articles on Airiti Library

airiti

從「客觀性」修辭的分析觀點，探究新聞報道文章標題的表現特徵

落合由治
淡江大學日本語文學系副教授

摘要

第二次世界大戰之後，日本的媒體以「客觀報導」理念為準則，從事新聞報道。但是，從媒體研究、媒體策略等觀點來檢視其「客觀性」，常會不少出現令人存疑之處。再者，從事日語教育上，對於媒體報導方式的客觀性完全採取百分之百的信賴，常採用新聞報導當作介紹日本實況的活教材。通常忽視新聞報導是否具有「客觀性」與否？

本篇論文，實際採樣了 2006 年 10 月份《每日新聞》頭版報導中的 19 條標題，並依據木下是雄所主張的「事實」與「意見」、中村明所主張的修辭方法、G. Lakoff &M. Johnson 所主張的比喻，三者為基準先明示其表現的特徵。繼之，再分析其「客觀性」修辭法。結果顯示：18 條新聞報導當中，無法判斷「事實」或「意見」的報導，以及修辭法或比喻中潛藏了寫作報導文章者意圖的文章居多。由此可見，新聞標題的「客觀性」，是值得存疑。

新聞報導的「客觀性」當然會依各家媒體的經營方針，多少有些差異。在獲得最終結論前，仍需增多採樣文章的數量，以及擴大至其他報社，才會更具說服力與客觀。然而現階段可以確定的是利用新聞報導當作日語教育的活教材，其所具有的「客觀性」，仍有再審視探討的空間。除此之外，解讀出基本的新聞報道文章的表現方法，乃至於利用修辭方法嵌入作者意圖之類的吹噓廣告方式，亦是本論文的一大收穫。此日文文章寫作方式，將可以循序漸進式教導給學生，成為學生在日文文章創作的一個參考指標。以利其順應不同情況之需。

關鍵字：新聞　新聞報道文章　標題　客觀性　修辭

airiti

Expressional Features of Headlines in Press Report Articles:
From a Viewpoint of Rhetorical Analysis of "Objectivity"

Ochiai Yuji
Associate Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

The mass media of Japan after the war executes the report of "Objectivity report". However, the viewpoint of the media research and media literacy has the doubt in the "Objectivity". Moreover, Japanese education had hardly considered "Objectivity" of the report. And, Japanese education has made the text of the mass media a live teaching material by a teaching material and the current class. Really, isn't there a problem concerning "Objectivity" there?

This thesis has preliminary investigated 19 headlines of reported articles in the top side of 'Mainichi Shinbun' in October, 2006. This thesis has caught expressional features of headlines based on "Fact" and "Opinion" by Koreo Kinoshita , the technique of the rhetoric by Akira Nakamura, and G. Lakoff &M. Johnson's metaphors. This thesis has done the rhetoric analysis concerning "Objectivity" at the same time. As a result, this research has found a lot of headlines impossibility of judgments concerning "Fact" or "Opinion" and usage of the rhetoric technique or the metaphor. As for this thesis, headlines of report articles are admitted that there are a lot of problems in the point of "Objectivity".

Therefore, Japanese education should reexamine "Objectivity" of the teaching material from the mass media and should be conscious of the expression techniques of text from the mass media In addition. We should teach the technique of the mass media in the class.

Key words: Press, Report article, Headline, Objectivity, rhetoric

airiti

新聞報道記事の見出しの表現的特徴
—「客観性」に対するレトリック分析の観点から—

落合由治
淡江大學日本語文學系副教授

要旨

戦後、日本のマスメディアは「客観報道」を理念とする報道を行ってきた。しかし、メディア研究、メディア・リテラシーなどの観点からはその「客観性」について多くの疑問が出ている。また、日本語教育では、報道の「客観性」についてほとんど意識せずに、今まで教材や授業で新聞記事などマスメディアの言説を生教材として扱ってきたが、はたして、そこに「客観性」に関して問題はないのだろうか。本論文では、予備的な調査として 2006 年 10 月の『毎日新聞』一面の報道記事の見出し 19 本に関して、木下是雄の「事実」と「意見」、中村明のレトリックの技法、G・レイコフ&M・ジョンソンの比喩を基準にその表現的特徴を捉えながら「客観性」に関するレトリック分析を行った。その結果、19 本中 14 本に「事実」か「意見」か判定できないもの、レトリック技法または比喩が用いられて書き手の意図が潜在しているものが見られ、報道記事の見出しには「客観性」の点で問題となる表現が多いと考えられる。

結論を出すには今後さらに調査数を増やし他社との比較が必要ではあるが、日本語教育でマスメディアに由来する生教材の「客観性」に関して、十分に再検討する必要があると同時に、表現技法として基本的な報道文から出発してレトリック技法を用いた隠された表現意図を込めたアピールまでを読解、作文などで段階的に教えることが求められている段階にきていると言えよう。

キーワード：新聞　報道記事　見出し　客観性　レトリック

airiti

新聞報道記事の見出しの表現的特徴
―「客観性」に対するレトリック分析の観点から―

落合由治
淡江大學日本語文學系副教授

１．はじめに

日本のマスコミ報道の特徴は「客観報道」の理念と言説にあると指摘され、日本のメディアは、「客観報道」を理念した報道によって、戦前のメディアが引き起こした戦争協力などの問題を戦後に克服したと考えられてきた[1]。

「客観報道」とは、新聞の場合、社団法人日本新聞協会が定める「新聞倫理綱領」によれば、以下のような理念である。

> 正確と公正　新聞は歴史の記録者であり、記者の任務は真実の追究である。報道は正確かつ公正でなければならず、記者個人の立場や信条に左右されてはならない。論評は世におもねらず、所信を貫くべきである。
>
> 独立と寛容　新聞は公正な言論のために独立を確保する。あらゆる勢力からの干渉を排するとともに、利用されないよう自戒しなければならない。他方、新聞は、自らと異なる意見であっても、正確・公正で責任ある言論には、すすんで紙面を提供する。[2]

メディア研究の視点から、大石裕・岩田温・藤田真文（2000）は、報道におけるこの「真実」、「正確」、「公正」の追究の相互関係を以

---

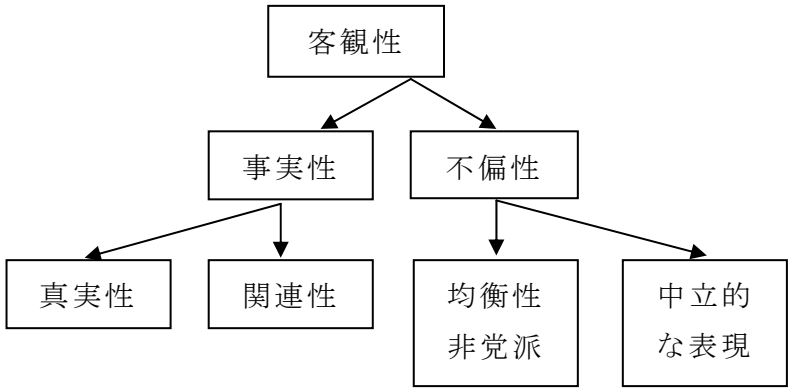
[1] 客観報道」に関する論説と研究は多々ある。一例として研究史を整理した中正樹（2006）『「客観報道」とは何か―戦後ジャーナリズム研究と客観報道論争』新泉社によれば、「客観報道」は戦前の戦争協力・煽動と政府追隨の報道に対し1945年の日本の敗戦後から1950年代にアメリカから導入され、1960年代から70年代にかけ報道の基本として確立された報道理念である。だが、1980年代以後、マスコミの「情報操作」による各種事件の中で、研究対象とされてきた。現在、報道内容の基準として、社団法人日本民間放送連盟と日本放送協会が1996年に「放送倫理/放送倫理基本綱領」を定め、2000年に社団法人日本新聞協会が「新聞倫理綱領」を定めている。

[2] 社団法人日本新聞協会（2000）「新聞倫理綱領」http://www.pressnet.or.jp/

airiti

下のように説明している[3]。

図１　報道の「客観性」概念



ここでは、「客観報道」の「客観性」は「事実性」と「不偏性」からなり、「事実性」は「客観性」の中心とも言える事件の経過をおう「真実性」とその事件を何に関連づけるかという「関連性」からなり、「不偏性」は特定集団に報道が量的に偏らない「均衡性・非党派」と報道対象への同調や拒絶をしない「中立的な表現」とからなる。しかし、この報道の「客観性」に関する研究については、メディア論、メディア研究、メディア・リテラシーなどメディアの言説や内容を取り上げた研究の中で多くの疑義が提出されている[4]。その中で、特に「客観報道」研究の史的整理を試みている中正樹（2006）は、マスメディア出身かあるいはアカデミズムの側かという「客観報道」研究の研究者の出身による視点の偏り、「客観報道」の理念の神聖化、報道記事を書くためにという視点でのジャーナリズムの「現場言語」と厳密な「客観性」を追求するアカデミズムの「研究言語」の対立に加えて、古代ギリシアの有名な逆説「クレタ人は嘘つきだとクレタ人が言った」と同様に、マスメディアの言説に自身への評

[3] 大石裕・岩田温・藤田真文（2000）『現代ニュース論』有斐閣 P24-27。図１は同書 P25 の図 1-2 から作成。
[4] 一例として三宅和子・岡本能里子・佐藤彰（2004）『メディアとことば１「マス」メディアのディスコース』ひつじ書房、三宅和子・岡本能里子・佐藤彰（2005）『メディアとことば２組み込まれるオーディエンス』ひつじ書房は、マスメディアの用いている言語形式や言説に注目した研究を行っている。

airiti

価が含まれているときその真偽は決めることができないという「自己言及的パラドックス」という問題を指摘している[5]。

こうした問題が指摘されてきているにも関わらず、日本語教育では、新聞・テレビなどのメディアの内容や言説についてほとんど検討を加えることなく生教材として広く用いている[6]。台湾の日本語教育でもメディアの作った言説は生教材として広く利用されている[7]。

「客観性」という点から見て、日本語教育に携わる者が、はたしてメディアの言説をそのまま教室に持ち込んでよいのか。そうした点から、新聞の報道記事の「客観性」の検証にレトリック分析の観点を取り入れ[8]、本論文では、報道記事の見出しを対象にして、その「客観性」に関してレトリック分析の点から考察することにする。

２．先行研究

2.1 見出しに関する研究

今まで新聞記事の見出しは大きく二つの点から取り上げられて

---

[5] 中正樹（2006）は、1980 年代以降に本格化したジャーナリズム研究について、研究者が経験的言論に偏るジャーナリズム出身者と理論的言論に偏るアカデミズム出身者に二分されて生まれるジャーナリズムへの価値観の対立、現場で使われる「現場言語」の優先、「対象である社会に観察主体がすでにふくまれてしまっている」という「自己言及的パラドックス」を挙げている。

[6] 一例として、アルク『日本語ジャーナル』NJ ニュース http://www.alc.co.jp/nj/2007_01/section3_news_jpn.swf は、新聞の報道記事を日英対照で載せている。また、雑誌を廃刊してできた「ALC　Japan」には「日本生活」としてニュース紹介のコーナーが設けられている http://www.jpalc.com/jp_life.php?action=news。また、凡人社（2006）『日本語教材リスト』36 凡人社には、「読解」教材の項目に新聞を利用した教材が多数掲載されている。

[7] 国立国語研究所（2004）『日本語教教育の学習環境と学習手段に関する調査』Ｐ70 参照。この台湾での国立国語研究所（2004）の調査によれば、高等教育で生教材を使う比率は 5 段階評価で、台湾人、日本人教員ともに約 3.6 で、現場で普通に用いられている 。特に高等教育では、台湾人教師ではテープ・ＣＤ（78.0%）に続いて、ビデオ（64.0%）、新聞（61.0%）、日本人教師では本（66.7%）、新聞・雑誌（各 62.5&）で、ともにかなり高い割合で使用されている 。理由は、高等教育では「学習者の興味関心をひく」「日本の事物や文化に触れさせる」が高く、日本の情報や状況を伝え興味関心を持たせる目的でマスメディアに由来するテクストが多用されている。

[8] 今までの日本語の新聞報道記事のレトリック分析の一例として落合由治（2007a）「「客観報道」の技法・小考―新聞の報道記事の文章構成をめぐって―」『2007 年日語教學國際會議論文集』東呉大學日本語文學系、落合由治（2007b）『日本語の文章構成に関する基礎的研究―テクスト論と結合して―』至良出版社』、落合由治（2007c）「新聞の報道記事のレトリック分析―『朝日新聞』と『読売新聞』の一面記事から―」『淡江外語論叢 10』淡江大學外國語文學院を参照。

airiti

きた。一つは記事を書く立場からの議論である。ジャーナリズムに従事した経験を踏まえマスメディアの記事の書き方を書いている稲垣吉彦(1987)は、見出しに要求されるのは「短くて、しかも一見して内容がつかめ、読んでみようという気持ちを起こさせる、そういう言語表現」だと述べている[9]。馬場博治・植条則夫編（2000/1988）は、さらに簡潔に見出しに求められる条件を「3C（正確collect、簡潔concise、平易clear)」と「選択choice、魅力charm」とし、その具体的方法は、「ニュースを構成する素材 5W1Hのどれがポイントか」を追求して、「見出しの活字の大小によってその記事の重要さに順位をつけ、また重要だと考えた記事を紙面の目立つ位置に配置し、読者に訴える」ことだと述べている[10]。

こうした点から言えば、新聞記事の見出しは、「短くて、しかも一見して内容がつかめ」る「3C（正確collect、簡潔concise、平易clear)」という「客観性」の背後に、「読んでみようという気持ちを起こさせる」「選択choice、魅力charm」というキャッチ・コピーのように読者を惹き付けるために書かれる宣伝文句などと似た性格を同時に持っていることになる[11]。

もう一つは記事の読み手の立場からの議論である。メディア研究、メディア論、文法論、文章論などの対象として新聞の見出しが取り上げられてきた[12]が、藤田真文（1999）が述べているように「客観

---

[9] 稲垣吉彦(1987)「見出しの言語表現」『入門マスコミ言語論』大修館書店 P129

[10] 馬場博治・植条則夫編(1988/2000)『マスコミ文章作法』創元社 P70-73 参照。

[11] 馬場博治・植条則夫編（1988/2000）では、新聞社では整理部へ配属された記者が、こうした見出しの付け方を編集長から指導されて（P65)、社の方針に合わせて記事を配置する（P73）と述べられている。そこからは、報道記事の「客観性」に関する尊重や配慮ではなく、「各社が個性を発揮し、セールスポイントとして売り込んでいくのは、どの記事をどんな判断で扱ったかという編集方針である」という経済的利害への顧慮しか見出せない。

[12] 新聞の見出しに関してはメディア研究、メディア論の視点からの内容分析は非常に多い。一例として小林睦子・内藤和美・高橋ゆかり（2003)「新聞報道にみる児童虐待(第 2 報)論評記事の見出し分析」『群馬パース学園短期大学紀要』5(1)群馬パース学園短期大学、木村洋二・板村英典・池信敬子他（2005)「「拉致」問題をめぐる 4 大新聞の荷重報道(3)「日朝実務者協議」を報じる見出し語の分析」『関西大学社会学部紀要』37(1)関西大学)、板村英典（2006)「新聞における「見出し」の表現形式:見出しの荷重要素とその「内容分析」をめぐって」『関西大学大学院人間科学:社会学・心理学研究』64 関西大学などがある。文法論、文章論の観点からは日比野茂夫（1992)「新聞見出しの文章」『愛知女子短

airiti

報道」の是非を論じる前に新聞記事の言語表現における客観性と主観性とは何かという問題が正面から論じられることは少なかった[13]。さらに、王世和（2005）が指摘したように、こうした研究では、たとえば「客観性」を必要とする報道記事と、主観性を表面に出せる論説記事というような新聞記事の文章の質の相違も問題にされてこなかった[14]。そうした中で、藤田真文（1999）は、新聞記事でのモダリティーの使用を調査して論評などを示す各種のモダリティー形式の記事での多用を指摘し、王世和（2005）は、論説記事に限って見出しの言語的形式から表現意図を整理して潜在する書き手の主観の存在を明らかにしている[15]。

本論文では、新聞記事の中から「客観性」を前提とする報道記事を対象に、その見出しの言語表現を「客観性」の点から取り上げることにする。

2.2 レトリックから見た「客観性」

言語表現における「客観性」の判定に関する論は種々あるが、本論文では、落合由治（2007c）が行なっている新聞の報道記事のレトリック分析で用いられているのと同じく、日本で現在「事実」と「意見」の書き分けのモデルとされている木下是雄（1992/1981）『理科系の作文技術』、日本語レトリックの全体像を整理分類した中村明（1991）『日本語レトリックの体系』、比喩論の分野で画期的な業績となったG.レイコフ&M.ジョンソン（2001/1986/1980）『レトリック

期大学研究紀要（人文編）』25、宮崎彰男（1998）「日刊報道誌と週刊報道誌における見出しの構造ならびにその明確さと簡潔さ」『三重大学教育学部研究紀要.人文・社会科学』49 三重大学教育学部、後藤利枝（1999）「論説文の文章構造と見出しの反復」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』5 日本女子大学、水内純清（2002）「統語論にみる新聞見出しの形態研究」『東アジア日本語教育・日本文化研究』5 東アジア日本語教育・日本文化研究学会など多数の研究がある。

[13] 藤田真文（1999）「新聞記事における論評の表明―モダリティー概念によるテクスト分析」鶴木眞編『客観報道―もう一つのジャーナリズム論』成文堂 P94 参照。

[14] 王世和（2005）「表現意図から見た社説の見出しの種類」『台湾日本語文学報』20 台湾日本語文学会 P218-219 参照。

[15] 藤田真文（1999）P122-124、王世和（2005）P236-237 参照。

airiti

と人生』を参照し、これをレトリック分析の基準にした[16]。

まず木下是雄（1992/1981）は、文を「事実」と「意見」に分け、「事実」を示す文を、真理（客観）とは何かそのものを規定する対象的概念的定義によるものと、真理（客観）をどう確認するかという操作的定義によるものとに分けた[17]。従来は概念的定義あるいは論理的定義からのみ「事実」か「意見」かが論じられてきた[18]が、木下は、各科学分野の研究で実証性、客観性を保証するために採られている操作的定義[19]を併用して、書かれた内容で確認できる書き方とできない書き方とを区別しようとした。さらに、木下は「事実」と「意見」の判別を、言語形式の面からも試みている。木下の判別基準は大きくは二つあり第一は文中の構成要素について「修飾語（形容詞、副詞）の絶対多数は、主観によってえらばれ、使われるもの―すなわち判断を表すもの―である」と述べている。「ワシントンは米国の初代大統領であった」と「ワシントンは偉大な大統領であった」という木下のあげる例[20]で見れば、「ワシントンは～大統領であった」は確認できる内容で「事実」だが、その中で「修飾語」の「初代」と「偉大な」の部分の質が異なる。前者は容易に確認で

[16] 木下是雄『理科系の作文技術』中央公論社、中村明（1991）『日本語レトリックの体系』岩波書店、G・レイコフ＆M・ジョンソン/渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳(2001/1986/1980)『レトリックと人生』大修館書店参照。落合由治(2007c)では、『読売』『朝日』の一面の報道記事が対象となっているが、今回は見出しを対象に同じ基準を適用する。

[17] 木下（1992/1981）は以下のように「事実」を定義している。(a) 自然に起こる事象（某日某地における落雷）や自然法則（慣性の法則）；過去に起こった、人間の関与した事件（某年某地における某氏の出生）などの記述で、(b) 然るべきテストや調査によって真偽（それが真実であるか否か）を客観的に確認できるもの。

[18] 「事実」と「意見」の区別を否定する論では、概念的定義、論理的定義での反論が多い、一例として、宇佐美寛（2003）「「事実と意見の区別」は有害無益である４」『現代教育科学』46-11 明治図書出版は、すべての言表は意見であるから「事実」と「意見」の区別は無意味だとして、「事実を表す言葉」と「意見を表す言葉」と言い換えを行っている。

[19] 高橋順一・渡辺文夫・大渕憲一編（1999/1998）『人間科学研究法ハンドブック』ナカニシヤ出版 P7 では、言語の持つメタファー性、個人差、文脈性を回避するために、理論的定義と同時に操作的定義の大切さを説き、「それが実行可能で観察可能な明瞭な操作手続きによっても捉えられるように定義する」ことで、「概念が理論的であると同時に操作的に定義されることにより、第三者による再現や検証が可能となり、公共性の確保が容易になる」と述べている。

[20] 木下（1992/1981）P101 および P107 参照。

airiti

きるので「事実」であるが、後者はそれより相対的に確認しがたいので「意見」である。第二は、文章中での「事実と意見の書き分け」で、互いに質の異なる「事実の記述には意見をさせないように」し、「事実を記述する文はできるだけ名詞と動詞で書き、主観に依存する修飾語を混入」させないことと、「意見」には原則として「私は～と考える」など「意見」を示す形式を付けるという点である[21]。つまり、文章中の各構成要素について以上の二点を指標に内容を比較することで、相対的に確認しやすい内容を「事実」、確認しがたい内容を「意見」として、相対的に分別できるということである。

次に、本論文では、報道記事のレトリック分析の技法的基準として、中村明（1991）が挙げる、技法の定義を用いる。中村は、レトリック技法分類の困難をあげ、技法整理の方法として「その表現を採る“目的”、それによって狙う効果」、視点、構成、語彙、表記などの「技法の“対象”」、「修辞的言語操作そのものを取り上げる“手段”」の三つの軸を設定して各表現技法を位置づけようとした[22]。それによって、主に文章展開に関わって生まれる「配列」「反復」「付加」「省略」の「展開のレトリック」と、書き手の読み手に対する伝達に関わる「間接」「置換」「多重」「摩擦」の「伝達のレトリック」という分類を行っている。例えば、「配列」のレトリックは「「ことば」の単位の大きさに応じて、一文中の語順の問題から、段落内での各文の位置、さらには、一編の作品の構成にかかわるところまで」「文章が展開していく上での配列順に関係する」「一群の表現技巧」である[23]。以上のように中村のレトリック分類の判定基準は、文章の構成要素の展開から意味の操作を判断できる技法と、比喩、引用、婉曲などの形式から意味の操作を判断できる技法とに分かれ、位置、形式を主な手掛かりにレトリック技法の有無を指摘しえる。

最後に、記事での語の用法の「客観性」の度合を判定する基準と

[21] 木下（1992/1981）P107、109、110 参照。
[22] 中村明（1991）31P
[23] 中村明（1991）97P

airiti

して、G.レイコフ&M.ジョンソン『レトリックと人生』以降の議論で活発になったメタファーとメトニミーに関する論を判定基準として用いる[24]。G.レイコフ&M.ジョンソンは、たとえば、「It’s hard to get that idea across to him.＜その考えを彼に通じさせる（＝わからせる）には難しい＞」、「I gave you that idea.＜その考えをあなたにあげた＞」のような慣用的表現を広くメタファーと捉え、慣用句や比喩を使ったこうした表現は話し手の事実に対する「間接理解」であり、「私は彼に～という考えを話した」のような慣用句や比喩を使わない表現は「直接理解」であると捉えた[25]。この慣用句、比喩の機能に関する認知比喩論の見解をふまえながら、本論文では、報道記事の中で慣用句や比喩を用いる場合を「間接理解」、使っていない場合を「直接理解」とし、相対的に前者を事実への指向からより離れた表現、後者を事実への指向により近い表現とした。なお、G.レイコフ&M.ジョンソンは英語の比喩しか取り上げていないため、日本語での表現の比喩か否かの判定基準は、中村明（1991）の比喩の定義になっている中村明（1977）中での指標比喩、結合比喩、文脈比喩の定義に従う。[26]

---

[24] G.レイコフ＆M.ジョンソン（2001/1986/1980）では、第８章でメトニミーとメタファーの関係が提示されているが、記述の大半はメタファーに当てられている。現在の認知意味論、たとえば谷口一美（2003）『認知意味論の新展開―メタファーとメトニミー』研究社では、「先生は鬼だ」のようなメタファーは「類似性に基づく比喩」、「やかんが沸騰している」、「お皿をたいらげる」のようなメトニミーは「近接性に基づく比喩」、「お花見に行く」、「手を貸す」のような「部分と全体」に関係した比喩はシネクドキとされ、比喩の種類を分ける試みが行なわれ、見孝編（2007）『メタファー研究の最前線』ひつじ書房ではこうした比喩の分類と効果に関するさまざまな議論が紹介されている。現段階で、分類や用法に関して定説があるわけではないので、本論文では具体的記事の中でこうしたすべての比喩をまとめて、慣用句の比喩とする。

[25] G.レイコフ&M.ジョンソン（2001/1986/1980）P12-14。

[26]中村明（1977）『比喩表現の理論と分類』国立国語研究所の中では、「特定の言語形式を備えており」「他から独立に抽出できる」指標比喩、「何らかの言語単位」間の結びつきに「慣用からの顕著な逸脱や非論理性、少なくとも言語上の論理的な飛躍が感じられる」結合比喩、「その表現形式が表す言語的な意味と、それがその場で表していると思われる個別的な意味との対応に慣用からの著しいずれが意識される」文脈比喩の３種の比喩が定義されている。指標比喩は形式で規定できるので問題は少ない。結合比喩は、文内の要素の結合によるもので、「時間が流れる」のような慣用句から文学的隠喩まで

airiti

以上、三つの観点を、報道記事を読む場合のレトリック使用の判定基準として、以下では、『毎日新聞』の一面報道記事の見出しを取り上げて[27]、どのような技法が用いられているかを報告したい。

３.『毎日新聞』の一面報道記事の見出し

3.1 調査項目と結果

以下では、報道記事の見出しの予備的調査として、『毎日新聞』2006 年 10 月 1 日から 2 日夕刊までの一面記事 19 本に見られる見出しについて、以下の項目を整理した[28]。

①見出しの配置

縦書きか横書きか、上下左右の位置、比較してみた見出しの文字の大小の違い。

②見出しの文の補填型

本文を参照し見出しを「文」と見なした場合に補うことができる、文の要素を入れて「文」に復元した内容。

③記事の比重

見出しの配置から考えて、その日の一面でトップになっている記事を大、その他を中、小さい見出しの記事を小とする。

④「客観性」に関わる問題

を含んでいる。文脈比喩は文単位以上で比喩として機能するまとまりである。言語形式に基づいて比喩効果が生じる各様式を整理しており、比喩の判定をかなり確実に行うことができる。P175-180 参照。

[27]2007 年 10 月の日本新聞協会「新聞広告データアーカイブ」（http://www.pressnet.or.jp/adarc/data/data01/01.html）によれば、総発行部数は約 5202 万部だが、以前は各社データが公開されていたが、最近は発行部数が公開されていない。広告の内藤一水社（http://www.naito.jp/eigyo-naiyo/todofuke/todofuke.html）によれば、日本の三大全国紙朝刊では、2007 年前半年の部数は『読売新聞』約 995 万部、『朝日新聞』約 804 万部、『毎日新聞』396 万部、『日経新聞』287 万部、『産経新聞』217 万部である。全国紙各社の基本的な政治的立場はかなり明確であるので、比較的中道と言われ、最近報道内容で大きな不祥事がない『毎日新聞』を選んだ。

[28] 記事本文について、同じ時期の『毎日新聞』に関しては、落合由治（2007）「「客観報道」の技法・小考―新聞の報道記事の文章構成をめぐって―」『2007 年日語教學國際會議論文集』東呉大學日本語文學系、落合由治（2007）『日本語の文章構成に関する基礎的研究―テクスト論と結合して―』至良出版社を参照。また、同じ時期の『毎日新聞』『読売新聞』『朝日新聞』の本文については落合由治（2007）「新聞の報道記事のレトリック分析―『朝日新聞』と『読売新聞』の一面記事から―」『淡江外語論叢 10』淡江大学外国語文學院を参照。

airiti

本文との対応関係も読みながら「事実」と「意見」、レトリック技法、比喩という三点から見て問題になる表現を見出しの中で取り出した。

以上の観点で整理したところ、以下の表１のようになった。

表１『毎日新聞』2006 年 10 月 1 日から 2 日夕刊までの一面記事 19 本の見出し[29]

通番	見出しの配置	見出しの構成	記事の比重（位置）	予想される見出しの文の補填型	「客観性」の問題点
1	福島談合で東急建設（横上）／計 1100 万円実弟に（縦右）／前知事の認識追究（縦左）	三	15（右上白抜き）大	福島談合で東急建設が／計 1100 万円を実弟に提供した／前知事の認識を東京地検特捜部が追究している	△計 1100 万円を実弟に提供した→この検察発表の引用はまだ「事実」とは言えない
2	日中首脳 8 日会談（縦右）／日韓会談は 9 日で調整（縦左上小）／安倍首相歴訪（縦左下）	三	12（右上白抜き）大	日中首脳が 8 日に会談する／日韓会談は 9 日で調整している／安倍首相の歴訪で	△安倍首相の歴訪で→政府間関係なのに安倍首相だけが取り上げられている、首相の個人名が見出しの最後になっている（順位のレトリック） ×見出しで日中が大きく日韓が小さい（対照のレトリック）
3	9 月日銀短観（横上）／景況感 2 期連続改善（縦右）／ゼロ金利解除／腰折れせず（縦左）	三	12（右上白抜き）大	9 月の日銀短観で／景況感が 2 期連続で改善した／ゼロ金利を解除しても／景気は腰折れせず	×ゼロ金利を解除しても／景気は腰折れせず→慣用句の比喩、因果関係の分析が正しいかどうか
4	腎臓を売買／患者ら逮捕（縦右）／臓器移植法違反で初（縦左）／愛媛県警（横下小）	三	9（左上）中	腎臓を売買した患者らを逮捕した／臓器移植法で違反で初めて／愛媛県警が	△腎臓を売買した患者ら→警察の発表はまだ「事実」とは言えない

[29] 記号説明：見出し／（縦）-縦書き（横）-横書き、（上下左右）-見出しの相互配置、（小）-小さい文字、／-区切れ・改行、見出しの構成／三-三部分、二-二部分、単独-一つの部分のみ、見出しの文の補填型／枠囲い-補った文の要素、記事の比重／2～-活字の相対的な大きさ、（上下中左右）-記事の位置、（白抜き）-活字の組み方、「客観性」の問題点／○-問題なし、△-判断の分かれる問題、×-問題あり

airiti

5	衆院代表質問（横上）／格差拡大を追究（縦右）／歴史認識も／民主・鳩山氏トップ（縦左）	三	6（中）中	衆院代表質問で／格差拡大を追究する／歴史認識も問う／民主・鳩山氏がトップで	×格差拡大→民主党の主張で「事実」かどうか分からない
6	ミッドランドスクエア（縦右）／オフィス棟きょう開業（縦左）／名古屋（横下小）	三	3（左下）小	ミッドランドスクエアの／オフィス棟がきょう開業する／名古屋で	○
7	糖尿病抑制へ（縦右）／国連決議要請（縦中）／国際糖尿病連合（縦左小）	三	2（右下）小	糖尿病抑制へ／国連決議を要請する／国際糖尿病連合が	○
8	移植手術病院に（縦右）／愛媛県報告要求（縦中）／臓器売買事件（縦左小）	三	2（中下）小	移植手術病院に／愛媛県が報告を要求する／臓器売買事件で	○
9	世界の壁ディープ無念（横上）／凱旋門賞3着敗退（横下）	二	9（左下）中	世界の壁にディープが無念をのむ／凱旋門賞で3着で敗退した	×世界の壁にディープが無念をのむ→擬人法の比喩
10	さらば名機YS11（縦右）／唯一の国産旅客機／就航41年、退役（横左）	二	6（中上）中	さらば名機YS11！／唯一の国産旅客機が／就航41年で、退役した	×さらば名機YS11！→「名機」は評価で意見、さらば～→呼びかけの形式、 ×退役した→比喩
11	金メッキで“再チャレンジ”（横上）／センター試験ICプレーヤー（横下）	二	6（左下）中	金メッキで“再チャレンジ”をする／センター試験でICプレーヤーが	×“再チャレンジ”をする～ICプレーヤーが→擬人法の比喩
12	吉田／101連勝でV4（縦右）／世界レスリング女子（縦左小）	二	4（中下）中	吉田が／101連勝でV4を果たした／世界レスリング女子で	×吉田→優勝した3人のことは見出しにない（選択のレトリック）
13	定年廃止に奨励金（縦右）／厚労省／中小企業を支援（縦左）	二	3（右下）小	定年廃止に奨励金を支払う／厚生省が／中小企業を支援するために	△中小企業を支援するために→～本当に支援することになるのか
14	南北軍事会談始まる（縦右）／4カ月半ぶり、板門店で（縦左）	二	3（右下）小	南北軍事会談が始まる／4カ月半ぶりに、板門店で	△4カ月半ぶり→タイムスケールの基準が恣意的
15	東証1カ月ぶり（縦右）／一時1万6300円台（縦左）	二	2（右中）小	東証で1カ月ぶりに／株価が一時1万6300円台になった	△1カ月ぶりに→タイムスケールの基準が恣意的
16	日中会談へ首相が意欲（縦右）／太田代表に表明（縦左小）	二	2（中）小	日中会談へ首相が意欲を／太田代表に表明した	×意欲を～表明した→慣用句の比喩

airiti

17	長期金利も上昇（縦）	単独	2（右中）小	長期金利も上昇した	○
18	90ブランド競演／パリコレ（縦）	単独	2（左上）小	90ブランドが競演する／パリコレクションで	×ブランドが競演する→擬人法の比喩
19	願書受け付け開始（縦）	単独	2（左下）小	大学入学願書の受け付けを開始した	○

見出しの１を例にして、内容を説明すると以下のようになる。見出し１は、写真１のような配置になっている。順番に、まず見出しの配置であるが、見出し１は、「福島談合で東急建設」が横書きで上にあり、その下に「計 1100 万円実弟に」が縦書きで右に、さらに「前知事の認識追究」が縦書きで左にある。よって、見出しの構成は、以上のように３部分に分かれている。記事の比重は、活字の大きさと一面の中での位置によって判定した。見出し１の最も大きい活字は、「計 1100 万円実弟に」の部分で縮刷版で 15 ㍉あり白抜きで印字され、記事は一面全体の右上に置かれている。今回調べた中では最も大きい活字が使われ、記事の読み始めの位置と考えられる右上にあるので、これはこの記事の比重は大きいと言える。

写真１　見出し１の配置、構成、比重

次に、見出しと本文を対照すると、「福島談合で東急建設が／計 1100 万円を実弟に提供した／前知事の認識を東京地検特捜部が追

airiti

究している」のように、本文にはあるが見出しの中にはない要素を枠囲いのように補填することができる。これを予想される見出しの文の補填型と呼んだ。これは、この記事の見出しを読む順序に関わっていると考えられる。この見出しは、補填した形で、順に（上）「福島談合で東急建設が」→（下右）「計 1100 万円を実弟に提供した」→（下左）「前知事の認識を東京地検特捜部が追究している」と上から下へ、右から左へと読むことができる。

後に考察するように、以上の見出しの配置、見出しの構成、記事の比重、予想される見出しの文の補填型のいずれもが、相互に関係し合って紙面の中で読者に対する見出しに込められた書き手の表現意図を表現する機能を持っていると考えられる。その点で、以上のような各表現要素は、見出しに込められた書き手の意図に関わる点で「客観性」に関して大きな影響を与えていると言える[30]。

さらに、レトリック分析の観点で直接、「客観性」に関わる問題点を見ていくと、見出し１では、「計 1100 万円を実弟に提供した」の部分は、本文に拠れば東京検察庁の発表の引用である。しかし、記事には引用は明示されず、また裁判で「事実」が確定されるという前提に立てば、裁判で確定していない「事実」をそのまま見出しに使ったことで、「事実」か「意見」か判定できないということになる。見出し１には、こうして引用に関わる真偽の判定不能という問題点が見出された。レトリック分析の基準でのこうした問題点は、各見出しに表１のようにそれぞれ見られた。

以下では、この調査結果に基づいて、見出しの特徴を考察する。

3.2 見出しの表現的特徴の考察

（１）見出しの配置、見出しの構成、記事の比重

見出しは配置に従って大きく分けると、三部分、二部分から成る場合と、単独の場合があった（写真２参照）。使われている活字の大

[30] 今までの研究では、福田充（2005／2001）「ニュースの情報提示形態と認知的効果」萩原滋編著『変容するメディアとニュース報道―テレビニュースの社会心理学』丸善が、新聞とテレビニュースの視覚的効果に注目する必要を説いているが、新聞記事の研究では注目されてこなかった。

airiti

きさを基準にし、紙面での位置も参照しながら予想される記事の比重の順に並べると、表１のようになった。見出し１から４のように大きな活字が使われ、紙面の上段に来る記事ほど、見出しは三部分から成る複雑な構成をしている。これらは比重が大きい記事と考えられる。

写真２　見出しの例

腎臓を売買 患者ら逮捕
臓器移植法違反で初
愛媛県警

定年廃止に奨励金
厚労省 中小企業を支援
厚生労働省は、厚生年金の支給開始年齢引き上げに合わせて定年を廃止したり、定年を65歳まで引き上げる中小企業に対し、最高で年間120万円の奨励金を支払う制度の導入を決めた。来年10
者雇用安定法は2013年度までに65歳までの継続雇用を企業に義務付けたが、中小企業にはハードルが高いため財政面で支援することにした。
厚生年金支給開始は13

の新作を披露する。初日はミナ・ペルホネン（皆川明）など日本人デザイナーの3ブランドも登場。ミナは、色鉛筆で描いたような花のプリントや猫の刺しゅうといった風合い豊か
90ブランド競演 パリコレ
な布を、ふわっと軽やかでナチュラルな服に仕立てた。
9月に開かれたマドリード・コレクションでは、共催者のマドリード

三部分　　二部分　　単独

しかし、6、7、8のように活字は小さくても三部分から成る見出しや、9、10、11のように二部分の見出しでも比較的大きな活字を使う見出しがあり、そうした形で見出しの配置、構成、比重を変えることで、記事の中での比重に微妙な配分を行っているように思われる。こうした配置、構成、比重に関わる表現要素をここでは、配分と呼ぶことにする。こうした配分は、紙面の構成自体により書き手または新聞社の表現意図を表現する手段と言える。紙面の配分のルールを新聞社が読者に明示しないで、こうした複雑な操作を行っていることは、報道の「客観性」に大きな影響を与えていると考えられる。記事には、見出し以外にも写真、図、グラフなど他にも多くの要素が視覚的要素として影響を与えていると考えられ、そうした要素と合わせて記事の配分をさらに考えていく必要がある。

（２）補填型での内容から見た見出しの内容の順序

次に、記事の本文から予想できる部分を補った補填型での内容から、見出しに出ている内容の順序を見る。見出し２を例に補填型を

airiti

どの順序で読んでいくかを見ると、見出し2はまず上段の「①9月の日銀短観で」から読み始めて、次に縦右の「②景況感が2期連続で改善した」へ、そして左の「③ゼロ金利を解除しても／景気は腰折れせず」が自然な読む順序になる。見出し1、3、9、10、15、16、17、19は、いずれも、①→②→③のように順番に見出しをそのまま上から下、右から左に読んでいくことができる。これをAタイプとする。

これに対して見出し2は右からまず「日中首脳が8日に会談する」があり、続いて左上の「日韓会談は9日で調整している」へ進んで、最後に左下の「安倍首相の歴訪で」となる。Aタイプを自然な順序として、これを基準にすると、見出しの各部分の順序は入れ替わり「①安倍首相の歴訪で」→「②日中首脳が8日に会談する」→「③日韓会談は9日で調整している」の順になる。つまり、見出し2は、Aタイプの①→②→③という見出しの各部分を並べ替えて、「②日中首脳が8日に会談する」→「③日韓会談は9日で調整している」→「①安倍首相の歴訪で」となっていると考えられる。このように見出し2のように、Aタイプの内容の順序を入れ替えてできる見出しには、4、5、6、7、8、11、12、13、14、18があり、これをBタイプとした。全体を以下の表2にまとめた。

表2 見出しの内容の順序

タイプ	通番	予想される見出しの文の補填型	見出しの内容の順序
A	1	①福島談合で東急建設が／②計1100万円を実弟に提供した／③前知事の認識を東京地検特捜部が追究している	①→②→③
	3	①9月の日銀短観で／②景況感が2期連続で改善した／③ゼロ金利を解除しても／景気は腰折れせず	①→②→③
	9	①世界の壁にディープが無念をのむ／②凱旋門賞で3着で敗退した	①→②
	15	①東証で1カ月ぶりに／②株価が一時1万6300円台になった	①→②
	16	①日中会談へ首相が意欲を／②太田代表に表明した	①→②
	17	①長期金利も上昇した	①
	19	①大学入学願書の受け付けを開始した	①
	10	△さらば名機YS11！／①唯一の国産旅客機が／②就航41年	△呼びかけ→①→②

airiti

		で、退役した	
B	2	②日中首脳が8日に会談する／③日韓会談は9日で調整している／①安倍首相の歴訪で	②→③→①
	5	②衆院代表質問で／格差拡大を追究する／③歴史認識も問う／①民主・鳩山氏がトップで	②→③→①
	6	②ミッドランドスクエア（縦右）の／③オフィス棟がきょう開業（縦左）する／①名古屋（下小）で	②→③→①
	7	②糖尿病抑制へ／③国連決議を要請する／①国際糖尿病連合が	②→③→①
	8	③移植手術病院に／①愛媛県が報告を要求する／②臓器売買事件で	③→①→②
	4	③腎臓を売買した患者らを逮捕した／②臓器移植法で違反で初めて／①愛媛県警が	③→②→①
	11	②金メッキで“再チャレンジ”をする／①センター試験でICプレーヤーが	②→①
	12	②吉田が／101連勝でV4を果たした／①世界レスリング女子で	②→①
	13	②定年廃止に奨励金を支払う／①厚生省が／中小企業を支援するために	②→①
	14	②南北軍事会談が始まる／①4カ月半ぶり、板門店で	②→①
	18	②90ブランドが競演する／①パリコレクションで	②→①

Bタイプの最後には、ほぼ「～で」または「～が」が補える要素がきている。中村明（1991）は、レトリック技法として「配列」を挙げており、AタイプかBタイプかという見出しの内容の順番は書き手による内容の「配列」の意図に大きく関わると考えられ、その選択には書き手や新聞社の表現意図が潜在することになる。「配列」は、配分と合わせて、報道記事の読み取りと受容に直接関係している報道の「客観性」に関わる問題を示している。

（3）「客観性」の問題点

最後に、第2節に示したレトリックの基準によって、「客観性」に関して問題となる部分を調べたところ、表3のように19本中5本の記事は、今、（1）（2）で述べた見出しの配分や「配列」のレトリックを除いて、確認可能な内容を見出しにし、目立ったレトリック技法や、比喩、慣用句を使っていない点で、「事実」を指向していると考えられる見出しであった。

表3「事実」を指向している見出し

通番	見出しの配置	記事の比重	「客観性」の問題点
6	ミッドランドスクエア（縦右）／オ	3（左下）小	○

airiti

	フィス棟きょう開業（縦左）／名古屋（横下小）		
7	糖尿病抑制へ（縦右）／国連決議要請（縦中）／国際糖尿病連合（縦左小）	2（右下）小	○
8	移植手術病院に（縦右）／愛媛県報告要求（縦中）／臓器売買事件（縦左小）	2（中下）小	○
17	長期金利も上昇（縦）	2（右中）小	○
19	願書受け付け開始（縦）	2（左下）小	○

これらは、「事実」として確認可能な内容を見出しにしているが、紙面では下段よりにあり、見出しの活字の小さい記事で、比較的比重が小さい記事と言える。

しかし、残りの 14 本には何らかの問題点が見られた。問題点を分類すると以下のようになった。

(a)「事実」かどうか分からない内容の見出し

その一つは、「事実」かどうか確認できない内容を見出しに出している場合で、以下の表４のように、ほぼ検察、警察、政府関係や公的機関の発表を引用して、記事にしている場合に見られた。色つけ部分が問題点である。

表４「事実」かどうか確認できない内容のある見出し

通番	見出しの配置	記事の比重	「客観性」の問題点
1	福島談合で東急建設（横上）／計 1100 万円実弟に（縦右）／前知事の認識追究（縦左）	15（右上白抜き）大	△計 1100 万円を実弟に提供した→この検察発表の引用はまだ「事実」とは言えない
4	腎臓を売買／患者ら逮捕（縦右）／臓器移植法違反で初（縦左）／愛媛県警（横下小）	9（左上）中	△腎臓を売買した患者ら→警察の発表はまだ「事実」とは言えない
13	定年廃止に奨励金（縦右）／厚労省／中小企業を支援（縦左）	3（右下）小	△中小企業を支援するために→～厚労省の発表の引用　目的は「事実」かどうか判定できない
5	衆院代表質問（横上）／格差拡大を追究（縦右）／歴史認識も／民主・鳩山氏トップ（縦左）	6（中）中	×格差拡大→民主党の主張の引用で「事実」かどうか分からない
14	南北軍事会談始まる（縦右）／4カ月半ぶり、板門店で（縦左）	3（右下）小	△4カ月半ぶり→タイムスケールの基準が恣意的
15	東証1カ月ぶり（縦右）／一時1万 6300 円台（縦左）	2（右中）小	△1カ月ぶりに→タイムスケールの基準が恣意的
3	9月日銀短観（横上）／景況感2期連続改善（縦右）／ゼロ金利解除／腰折れせず（縦左）	12（右上白抜き）大	×景況感が2期連続改善した→改善の基準が恣意的
10	さらば名機 YS11（縦右）／唯一	6（中上）中	×さらば名機 YS11！→「名機」は

airiti

	の国産旅客機／就航 41 年、退役（横左）		評価で意見

（注）「客観性」の問題点／△-判断の分かれる問題、×-問題あり

見出し１は「計 1100 万円実弟に」という検察の発表、4 は「腎臓を売買」という警察の発表、13「中小企業を支援」は厚生労働省の発表、14「格差拡大」という反政府勢力あるいは民主党の主張を、それぞれ引用と示さずにそのまま見出しに使っている。いずれも「事実」かどうかは未確定で確定できない引用の内容が、その他の確認できる「事実」と同時に提示されている。

さらに、見出し 14「4 カ月半ぶり」、15「1 カ月ぶり」は、ともに「～ぶり」になる基準が不明で恣意的である。3「2 期連続改善」も「改善」の基準は明かではなく、また「改善」は一種の評価で「意見」である。同じく 10「名機 YS11」も評価である。これらは、いずれも「事実」かどうか確定できない内容か、あきらかな「意見」が、その他の確認できる「事実」と同時に提示されている。

こうした、「事実」を指向する見出しの中に「事実」かどうか確定できない内容が修飾文節として嵌め込まれた見出しの構成を、嵌め込まれた点に注目してモザイク的構成と呼ぶことにする。

(b) レトリック技法・比喩を使用している見出し

もう一つは、レトリック技法・比喩を使用している場合である。表３の見出しの書き方を「客観性」を指向し保証する原則と見れば、以下の表５に示したこれらの見出しは、明らかにこの原則から逸脱した表現をあえて行っている。これらは、ほぼ政治課題、娯楽、社会のテーマの報道で見られた。色つけ部分が問題点である。

表５レトリック技法・比喩を使用している見出し

通番	見出しの配置	記事の比重	「客観性」の問題点
2	日中首脳 8 日会談（縦右）／日韓会談は 9 日で調整（縦左上小）／安倍首相歴訪（縦左下）	12（右上白抜き）大	△安倍首相の歴訪で→政府間関係なのに安倍首相だけが取り上げられている（「類形異義近接」のレトリック）、首相の個人名が見出しの最後になっている（「序次」のレトリック）×見出しで日中が大きく日韓が小さい（「対照」のレトリック）
12	吉田／101 連勝で V4（縦右）／世界レスリ	4（中下）中	×吉田→優勝した 3 人のことは

airiti

	ング女子（縦左小）		見出しにない（「情報カット」のレトリック）
9	世界の壁ディープ無念（横上）／凱旋門賞3着敗退（横下）	9（左下）中	×世界の壁にディープが無念をのむ→擬人法の比喩
10	さらば名機 YS11（縦右）／唯一の国産旅客機／就航 41 年、退役（横左）	6（中上）中	×さらば名機 YS11！→さらば～は呼びかけの形式、 ×退役した→擬人法の比喩
11	金メッキで“再チャレンジ”（横上）／センター試験 IC プレーヤー（横下）	6（左下）中	×“再チャレンジ”をする～→擬人法の比喩
18	90 ブランド競演／パリコレ（縦）	2（左上）小	×ブランドが競演する→擬人法の比喩
3	9 月日銀短観（横上）／景況感 2 期連続改善（縦右）／ゼロ金利解除／腰折れせず（縦左）	12（右上白抜き）大	×ゼロ金利を解除しても／景気は腰折れせず→慣用句の比喩
16	日中会談へ首相が意欲（縦右）／太田代表に表明（縦左小）	2（中）小	×意欲を～表明した→慣用句の比喩

見出し 2 は、写真 3 のような配分と「配列」である。

日中首脳8日会談

日韓会談は9日で調整

安倍首相歴訪

安倍晋三首相

写真3

ここでは日中、日韓の政府間関係交渉のニュースであるにもかかわらず、「日中首脳～会談」「日韓会談」「安倍首相歴訪」と関係国の中で安倍首相だけが人物として取り上げられ、レトリックの「類形異義近接法」[31]が用いられている。同時に、「日中」「日韓」「安倍首

[31] 中村明（1991）は「類形異義近接法」について「意図的に近くに廃した同根の語または語形の類似した異語が当然それぞれ異なった意味・用法を実現する点に読者はおやっと思う」と述べている。P359。

airiti

相」の順になっているのは「序次法」[32]のレトリックであり、見出しで日中が大きく日韓が小さいのは、「対照法」[33]のレトリックと言える。同様に、見出し 12 の「吉田」は吉田　保里選手で、記事本文中には同じ大会で優勝した坂本日登美、正田絢子選手も出ているが、見出しには吉田選手しか出していないのは、価値の低い情報を削除する「情報カット」[34]のレトリックである。

見出し 9、10、11、18 はいずれも、「擬人法」である。見出し 9「世界の壁にディープ無念」は「世界の壁」というメタファーと同時に、ディープインパクトという人気競争馬を人間に見たてて「無念」をのむと表現している。以下、同様に 10「さらば名機YS11！」は旅客機のYS11 を人間に見たてて「さらば～」と呼びかけの形式を使い、「退役した」としている。11 も「ICレコーダー」が人間のように「再チャレンジ」をする、18 も「ブランド」が人間のように「競演する」と、いずれも「対象を人格化する」擬人法の比喩である[35]。また、見出し 3「景気は腰折れせず」、16「意欲を～表明した」はともに「景気が腰折れする」「意欲を表明する」という慣用的な結び付の表現を使用した慣用句の比喩である[36]。これらは、すべて慣用句、比喩が使用され「事実」を「間接理解」として表現している。

これらの見出しでは、「事実」として確認できる内容の上に、言わば言語的に塗り重ねるような形でレトリック技法または「間接理解」の慣用句と比喩が被せられており、「事実」はそうした表現の背後に覆い隠されてしまっていると考えられる。そして、ここにも、そうした表現を選んで用いた記者あるいは編集担当者の主観的表現意図が当然、見出しの背後に明らかに隠れていることになる。レト

---

[32] 中村明（1991）は「序次法」について「読み手の頭と心にできるだけ抵抗なく入っていくように、事柄を特にきちんと順序だてて述べるやり方」と述べている。P101。
[33]中村明（1991）は「対照法」について「相反する性格の二者を並立させることで互いに他を引き立て合う効果を狙う表現技術」としている。P117。
[34] 中村明（1991）は、「情報カット」について「価値の低い情報を言語化しないという方向での書き方」としている。P207。
[35] 中村明（1991）P283 参照。
[36] 中村明（1991）P277 では指標比喩と述べている。

airiti

リック技法や慣用句・比喩の使用により「事実」を言語的、形態的に覆い隠すようなこうした見出しの構成を、　彩的構成と呼ぶ。

４．おわりに

以上、あくまで予備的考察であるが『毎日新聞』の一面記事の見出しには、「客観性」から見たとき問題になる点が 19 本中 14 本に見られ、こうした表現が見出しに多数用いられている可能性が高いことが分かった。こうした結果は、本文の分析とも一致している[37]。その中から、「客観性」に関わる大きな問題点として、見出しのモザイク的構成と　彩的構成が浮かんできたが、これは木下(1992/1981)を判定基準にした場合はもちろん、メディア研究での大石裕・岩田温・藤田真文（2000）の「客観性」の原則にも明らかに抵触している。しかも「客観性」に問題のある見出し中、8 本は活字の大きさが 15 から 6 までの比重の比較的大きな記事であり、それだけに「客観性」に関わる問題は大きいと言える。

以上から、今まで行なわれてきたメディア研究、文章論での研究と共に、レトリック分析の点からも見出しを捉えていく必要がある。

とくに日本語教育の現場で、新聞記事の表現と内容の「客観性」を検討することなく、生教材として用いている現状は、メディア・リテラシー、異文化コミュニケーションなどの点から見ても危険性のある大きな問題であり、教材化する準備の段階で、どのように「客観性」を確保するか検討が必要である。一方、こうしたモザイク的構成と　彩的構成は表現技法として、書き手の表現意図を見出しなどに込める場合の方法として、読解、作文などの授業に取り入れることができる。新聞の報道記事で見られるこうした技法は、ビジネスで役に立つ「客観性」に訴えるキャッチ・コピーや宣伝文句の書き方の見本になるとも言える。

このように新聞記事の言説は言語的性格として両　の　である

[37] 注 28 を参照。

airiti

と言え、その言語的表現的特徴を多面的に捉えて教材として利用することで、さらに日本語教育を一歩進めることができる。

なお、本論文は、2008 年 2 月 16 日に台湾日本語文学会第 231 例会で発表した内容を加筆訂正した 96 年度国家科学会研究計画･計画編号 96-2411-H-032-013-による成果の一部で、研究へのご支援に礼申し上げる。また、査読では丁寧なアドバイスをいただき、ご指摘に感謝申し上げる。記事の構成の解明と応用に向けた研究を続けながら、残された課題について今後も探求して行きたい。

資料

毎日新聞社（2006)『毎日新聞縮刷版平成 18 年 10 月号』毎日新聞社

参考資料

アルク「ALC　Japan」「日本生活」http://www.jpalc.com/jp_life.php?action=news
『日本語ジャーナル』NJ ニュース http://www.alc.co.jp/nj/2007_01/

参考文献（注以外）

有山輝雄・竹山昭子編（2004)『メディア史を学ぶ人のために』世界思想社
植村勝彦・松本青也・藤井正志（2006/2000)『コミュニケーション学入門―心理・言語・ビジネス』ナカニシヤ出版
楠見孝（2007)『メタファー研究の最前線』ひつじ書房
クラウス・クリッペンドルフ/三上　治・　野信雄・橋本良明訳（2006/1989)『メッセージ分析の技法―「内容分析」への招待』　草書房
佐藤　（1990)『マスコミの受容理論』法政大学出版局
ジョージ・レイコフ/池上　彦・川上誓作他訳（2003/1993)『認知意味論―言語から見た人間の心』紀伊國屋書店
鈴木みどり編（2004/1997)『メディア・リテラシーを学ぶ人のために』世界思想社
船津衛（2004/1996)『コミュニケーション入門―心の中からインターネットまで』有斐閣
山口功二・渡辺武達・岡満男（2002/2001)『メディア学の現在　新版』世界思想社
山梨正明（2000)『認知言語学原理』くろしお出版
好井裕明・山田富秋・西坂仰（2004/1999)『会話分析への招待』世界思想社